ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2006 年 12 月 29 日
■連絡先　藤川博樹
〒 115-0045
東京都北区赤羽 1-48-3-203
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.300

祝！ 300 号特集

1 月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5 枚（2000 字）
小説：10 枚（4000 字）目安
■締め切り
2007 年 1 月 21 日（日）
■購読料・年会費
1200 円（年）
切手 80 円× 15 枚
郵便振替：東京 00170-1-18290

入会しました

古澤公勢伊

年齢を重ね、最近は末期の眼で世間を見ることが出来る気がします。「栄枯盛衰は世の常」とはよく言ったもので、天界から見れば、すべては大したことなく、慶事・凶事といえども無事に如かず。そう考えて、日々を穏やかに過ごしてゆきたいと思っています。

ただ、人の喜びや新しい知識には素直に感動することを忘れないよう心得てゆきたいものです。そのために、３００号を重ねる「ふみの会」に入れていただきました。よろしくご指導をお願い申し上げます。

◆新入会員紹介

＊発足以来初、一気に四人の入会です＊

松浦由美子さん
　大阪市港区　シャンソン歌手
坂東正巳さん
　奈良市七条　フルート奏者
中川益夫さん
　大阪府泉南郡　物理学者
古澤公勢伊さん
　岸和田市　会社役員

ふみの会ニュース300号を迎えて

藤川博樹

「ふみの会ニュース」は、今号で三〇〇号を迎えた。毎月1回発行で、年平均十一回、二十八年かかったわけである。そこで、この機会に、三〇〇号の歩みを簡単に振り返っておきたい。

ふみの会
同人会発足！
【例会】
第1回例会
11月2日(木)

「第一号」一九七八年一〇月一七日（B4縦、横書き一枚）

ふみの会創立は、一九七八年十月十五日である。文学同人会として発足したことが、早くも二日後の十月十七日に発行されたニュース一号に記載されている。なぜ、こんなに手際がよく素早く発行できたかというと、創立同人の一人である蒲原雅人氏の功績によるところが大きい。彼は、十年間勤めた職場をやめ、背水の陣で文学教室に参加していた。アマダを退職するとき、同僚達が万年筆を贈ってくれた。その万年筆を使って、会当日、目の前で、あるいは家に帰ってからすぐにサラサラと読める字でニュースの（原稿でなく）版下を書いた。次の集まりにはそのコピーが参加者全員に配られた。おかげで、会創立の様子や、参加者、会則などが広く行き渡ったため、創立当時六十名以上の参加を得たのである。なお、雅人氏のこの大活躍の万年筆は、残念にもその後紛失されたとのこと。

また、会創立の当日には、重森孝氏のプロデュースで、プロのカメラマンによる大量のスライドが撮影され、後に音楽付きのスライドショーが制作された。参加者のインタービューまでなされていて、会創立の貴重な記録が残されている。

「第七号」一九七九年二月二〇日

◆ふみの会ニュース二百号献辞

300号に寄せて

中井　豊

ともかく300号というのは、価値があります。何と言っても、30年になろうかという継続性は誰しもが認める実績でしょう。編集に当たる人達には本当に感謝しております。

ひょんな事から藤川氏と知り合ったことが始まりで参加させてもらっています。本誌がなければ文章を書くことをしないまま徒に時を過ごすことになりかねない所でした。それが、今では友人知人に入会をすすめるようにまでなりました。いつの日か本格的なフィルム製版の印刷物になればいいですね。

個人への敬愛と信頼をうたいあげた教育基本法までが憎悪と不信に基づく統制をめざすものに改悪されました。将来の日本社会の姿を思うと背筋が寒くなる昨今ですが、思想と表現の自由を守るためにも文章は益々重んじられなければならないと思います。一緒に心身ともに元気でのびのび書き続けましょう。

「ふみの会」様

瀧本　文彦

「ふみの会」のに入らぬかと誘われたが、日記も書いたことが無く、年賀状すら年末から年始にかけて五枚書くていどの僕が、書くテーマもあまり無さそうで語彙少なく文法は知らずの及び腰。書けたとしてもすぐネタがきれそう。書いた文章は稚拙で笑いものでは……。しばらく考えたが根は断りきれぬ性格。文章を書くことは恥をかくことと思い、開き直って誘われるままに書き始めた。

もう種切れと思いつつ書いていると小さな穴からポロリと種がこぼれ落ちてくる。もうおしまいと思っているとまた小さな種がポロリと一粒落ちてコロコロコロころがり僕は慌てて小さな種を拾う。次の回も種が一粒転がり落ちてくれれば天の恵

七号には、七九年二月、同人誌「文海」（ぶんかい）の発行が報告されている。この創刊号は三百部発行してあっと言う間に売り切れ、利益がでたというめでたくも貴重な号である。

「一一号」一九七九年七月一七日
七九年七月におこなわれた、民文・よこすか支部との合同合宿の様子が、前月の新入会員、吉村亮二氏によって報告されている。

「一〇号」一九七九年一〇月二一日
ふみの会創立一周年総会の報告。今号は、総会であらたに広報部員に選出された赤塚静子氏によって編集・作成されている。赤塚氏は、八〇年一二月の三〇号まで編集に携わっている。

「一七号」一九七九年一一月二五日
創立一周年総会で、あらたにニュース発行担当の広報部員が選出されたため、蒲原雅人氏の手書き版下にずっと頼っていたのを改め、広報部員を中心に会員が集まってニュースの原稿・版下を作るという作業習慣がこの号から始まった。それとともに、この号からB5縦書きに判型が変更され、そのスタイルが今日までずっと続いている。
担当部員をおいただけあって、また、看護関係の出版社の編集者でもある赤塚氏の役割に負う所大きく、内容も多彩で会の活動報告が中心であった一六号までと一線を画し、月刊雑誌としても楽しめる内容になっている。

「桜島」で合評会（例会報告）
「文海」三号によせる―冬敏之氏の手紙―
弱者の論理―会長あいさつ―（吉田）
名作紹介「戦争と平和」（藤川）
事務局だより
かんかんがくがく（文海三号感想、寄贈お礼のお便り四通紹介）
消しゴム（コラム、大江健三郎「同時代ゲーム」）
消しゴム（コラム、山田太一ドラマの世界）
編集後記

「一六号」一九八〇年八月一七日
ふみの会レクリエーションとして、北八ヶ岳登山の連絡。これまでにも、七八年の駒ヶ岳、七九年の白馬と毎年、登山を続けた。

「一八号」一九八〇年一〇月二六日
一〇月一九日に行われた第三回総会で、下村和枝氏がニュース編集担当になり、京王線永山の下村氏自宅でニュース編集が行われるようになった。氏の自宅でのニュース編集は、一九八一年九月の三九号発行まで一年間続いた。

み。大きな種はいりませぬ。小さな種で結構でございます。天に祈るこの頃。なせばなるなさねばならぬ何事もと思いつつ「僕の趣味はエッセイを書くこと」と言ってしまい赤面する。エッセイとはどういうものか分からぬのに。

「ふみの会」はこの時期ピタリと３００号になりますか。スタッフの皆様の協力と、苦楽あっての３００号だなと思いお礼を申し上げます。３００を３重丸と呼ばせていただき、ぜひ５重丸を目指し歩みつづけていただきたく思っております。

書くことは考えること。書くことは反省すること。書くことは何かを願うこと。宇宙の年齢は１３０億年。地球の年齢45億年に比べりゃ人の一生はほんの瞬き。「ふみの会」の年齢は３００号年。５重マルの５００号年の頃には僕がこの世にいるやらいないやら。あの世にいっても書き続け閻魔大王に私はエッセイストと法螺貝を吹き鳴らしているかも……。

いろいろと有り難うございました。皆さんの作品の届くのがたのしみです。

「四〇号」一九八一年一〇月二九日
一〇月一八日に行われた第四回総会で担当が替わり、吉田氏の吉田商会でニュースが編集・制作されるようになる。吉田商会の事務所でのニュース制作は、九一年三月の一四五号まで、実に十年間続く。吉田商会のコピー機は初期のニュース発行を物質的・経済的に支えた。
蒲原雅人の「古典への憧憬」の連載が始まる。ルソー、柳田国男、森鴎外などを取り上げ、五二号まで一年間続いた。氏の文章の一段の深化を感じさせた連載だった。

「五〇号」一九八二年八月三〇日
秋の旅行の計画、「金沢―敦賀―小浜」への参加を呼びかけている。小浜市在住の武藤永二郎氏の紹介で、金沢文学散歩、敦賀・小浜の原子力発電所見学、明通寺副住職中島哲演氏インタヴューなどを企画したもの。

「五一号」一九八二年九月二五日
民主文学二〇期卒業生の「野人の会」から合同合評会の申し入れがあり、「野人一五号」「文海七号」の合同合評会が市ヶ谷で行われた。

「七一号」一九八四年六月二四日
文海一〇号記念インタビューとして「中里喜昭氏と語る」の企画が掲載されている。インタビューは七月八日に東中野地域センターで行われ、「文海一〇号」に掲載された。

「七六号」一九八四年一二月五日
ニュース発行責任者の吉田氏が大宮に引っ越したため、発行元住所が「板橋区清水町」から「大宮市上子町」に変更になった。

「八〇号」一九八五年三月三一日
お花見ハイキングの奥武蔵高山不動行きの呼びかけ、中国旅行の企画・決定が掲載されている。中国旅行は四人の参加で、四月中旬十日間にわたって行われた。

「八七号」一九八五年一〇月二八日
八期総会特集号として、二四頁ある。これまでのところ二〇〇号の特別号三二頁を除いて最大の頁数であり、定型郵便のぎりぎりである。内容は以下のように盛り沢山だ。

巻頭コラム「一年たつのは早い・・・」
ふみの会のあらたな総会に向けてぼくは
「文学」というものをこう思ってみた、
どうなのだろう、こんなこと……（吉田）
ふみの会第八期活動方針案
ふみの会一年の感想―総括に代えて（藤川）
いわゆる「文学的衝迫」について（武藤）
Y・A君へ―「インドを考える」について
を考える―（蒲原直樹）
米沢に倒れる（直樹）
若狭から熊野へ―若狭―その二（安部）
冬敏之私論（十二）（蒲原雅人）
乾闥婆往来　連載八―羅刹の章3（雅人）
第八回ふみの会総会招請状
おしらせ―葦牙四号に文海一〇号中里インタヴューが転載

「八八号」一九八五年一二月五日
総会の様子を伝える文章と四枚の写真を含む、前号に続く二四頁の充実した内容。第八期総会出席者は、重森、吉田、飯島、反町、安部、武藤、蒲原雅人、菊地、蒲原直樹、藤川の十人。

「八九号」一九八六年一月一日
ニュースの原稿として、初めてワープロの原稿が出現した。「いわゆる『文学的衝迫』について2―小田切秀雄『小林多喜二問題』（序）」（武藤永二郎）という記事で、追記に「安いワープロをかったので、それで打った。」とある。それまでの、ニュースの原稿は、すべて手書き原稿を貼り合わせて版下とし、コピーしたものだった。氏がいかに先進的だったかがわかる。この一編以外はすべて手書きだが、手書きのニュースは今見ても決して読みにくいものではないし、書き手の個性が出て親しみ深いものである。これ以後、ニュース原稿に徐々にワープロの版下が使われるようになる。

「九〇号」一九八六年二月一日
二四頁の充実した内容。巻頭に中里喜昭氏の特別寄稿「『文化評論』編集部への手紙」が掲載された。前号の武藤氏に続いてワープロの文章を貼り込んで版下とした記事で、氏はワープロその他ハイテク機器の活用について最も先進的な作家の一人である。

「九一号」一九八六年三月一日
二四頁、充実した内容。巻頭に「小説の可能性―大江健三郎『同時代としての戦後』を読んで」（吉田悦郎）がワープロ版下で掲載。奥さんがワープロ・オアシスを購入し、版下作成を内職とするようになったおかげである。氏の悪筆はこれ以後、奥さんの入力になり、読みやすくなった。

「九八号」一九八六年一〇月一日
若狭例会特集号。若狭例会の実現は、創立時からの会員、武藤永二郎氏の尽力によるところ大きい。現地では、芝田英昭氏に民俗博物館を案内していただき、増井邦昭氏に原発の案内・解説をお願いした。美浜原発、宿泊でお世話になった西福寺、若狭の美しい景色のスナップ写真が掲載されている。例会参加者は、吉田、飯島、塚原、蒲原雅人、反町、蒲原直樹、大野、奥野、滝本、藤川、武藤。

「一〇〇号」 一九八六年一二月一日
一〇〇号記念号。表紙、裏表紙に灰色の色紙を使っている。この頃になると同人がワープロを手に入れ始め、蒲原雅人氏の文章以外はオールワープロである。

「文海」十一号原稿募集
これが幻のNO〇〇一だ！！
ふみの会ニュース一〇〇号にあたって（藤川）
ふみの会ニュース一〇〇号記念メッセージ
かつぎ屋讃（中里喜昭）
一〇〇号の発刊に寄せて（冬敏之）
現代芸術の空洞化（蒲原直樹）
乾闥婆往来
連載二二―焔硝の章2（蒲原雅人）
主題と「言語」というもので
……思いめぐらすと――（吉田）
若狭レポート一四　若干の報告
―大飯三・四号公開ヒアリング（武藤）
冬敏之私論　最終回（雅人）

「一〇一号」
紛失。吉田事務所でのニュース作成作業をしつつ蒲原雅人の到着を待ったが、年末の会社忘年会のあと池袋近辺で沈没した模様。吉田氏が事務所に泊まり、翌日曜日、一人で作成、発送作業。版下や予備が残らず、ニュース現物は確認できず。

「一〇五号」 一九八七年五月九日
「ぼくの時ならぬ時」という安部氏（作家・安部龍太郎）のデビュー直前の文章が載っている。「たとえ、五年、十年、あるいは一生認められなかったとしても、この短い人生で、自分のやりたいことに全身全霊をつくして打ち込んだという満足感は残るだろう」という覚悟のほどが述べられている。氏は翌年、週刊新潮連載中に病気で倒れた作家の代打で登場という劇的デビューを果たし、今年で作家生活十八年になる。

「一〇六号」 一九八七年七月一三日
前月、六月七日の第九回総会、および、六月二七日から一泊の箱根仙石原合宿のスナップ写真を掲載。総会参加者は、重森、吉田、蒲原雅人、反町、安部、蒲原直樹、藤川、（宮本、大槻：直樹の学友）の九人。箱根仙石原合宿の参加者は、吉田、武藤、蒲原雅人、塚原、蒲原直樹、反町、藤川、（毅、綾：藤川家族）。

「一一〇号」 一九八七年一一月三〇日
奥多摩鳩ノ巣キャンプ―川苔山登山（一一月一日から二泊三日）の報告とスナップ写真。「『ふみの会』のイベントに参加して」（仲村礼子）は仲村さんのニュース初登場の原稿。参加者は、吉田、蒲原雅人、武藤、反町、蒲原直樹、安部、藤川、（仲村、前田清美）の九人。安部氏は現地までスクーターで到着。帰り道青梅街道で大雨に降られ、ずぶ濡れになって四〇度の熱を出し数日間寝込む。翌年作家デビューを果たす。仲村さんはこの後、ふみの会に入会、蒲原雅人氏と結婚。

「一一五号」 一九八八年五月二五日
五月三日四日の奥武蔵名栗川キャンプ合宿の報告。塚原氏が家族ぐるみで参加（夫人、一〇歳と五歳の息子二人、長男の友人）。他に吉田、蒲原雅人、藤川参加。

「一一二号」 一九八八年一一月三〇日
塚原氏のエッセイ「賃労働と文学」に、「四〇歳になった。……ラディカルに生きていこうと思っている。……妻と私の二人のこどもたちも着実に異端と反逆の精神を身につけはじめている。十歳と五歳。この子たちに残されている膨大な時間と想像力もまた私とともにあることを確信している」という文章は、話題になった。

「一二六号」 一九八九年五月一日
四月一五日から一泊で行われた熱海合宿の報告。「中里喜昭さんをむかえて温泉に入ってのんびり語りあおうの集い」中里さんの最新作『昭和末期』を中心に熱く盛り上がった様子を伝えるスナップ写真。参加者は、吉田、蒲原雅人、武藤、藤川、蒲原直樹、仲村、（倉又順子、佐藤よね子）。

「一四三号」 一九九一年一月二六日
新年特大号として、久しぶりに二四頁。連載三本（新連載二本）とある。前年末の那須合宿（日光中禅寺湖、戦場ヶ原、吉田工場見学）のスナップ写真を四頁にわたって掲載。合宿参加者、吉田、蒲原雅人、山崎、塚原、蒲原直樹、藤川、奥野、仲村、（桃原：仲村友人）。

巻頭エッセイ（奥野）
母、老いたる我が母の、死に至る病
　老人性痴呆症…その後（山崎）
正調環境保護物語　森をさがして（直樹）
新連載　越後山ザルてん末（吉田）
連載八回　コミック・アシスタント（雅人）
歴史は楽し
　―安部龍太郎「血の日本史」―（塚原）
新連載　夜の銀蛾（藤川）
東京グルメ情報5　浪花亭（洋食）（山崎）
詩・戦争（仲村）

「一四六号」 一九九一年四月二八日
ニュースの製作場所が、十年続いた吉田事務所から、池袋東口マイクロデザインに変更。一九九四年十月の一八一号まで三年半続く。
四月六日から一泊で行われた館山合宿のス

ナップ写真を掲載。合宿参加者、吉田、吉田夫人、塚原、雅人、仲村、武藤、反町、直樹、藤川。

「一五二号」一九九一年一一月三〇日

一一月二三日に足立区勤労福祉会館で行われた「蒲原雅人、仲村礼子さんの結婚を祝う会」のスナップ写真を二頁にわたって掲載。作家・中里喜昭氏のスピーチがあり、詩の朗読、バイオリン独奏など盛り沢山の内容で、一〇〇名以上の列席者があった。ふみの会からは、仲人吉田夫妻、下村氏のフラメンコ、重森夫妻、塚原一家、菊池、山崎、藤川、柳沢が参加。佐藤ユミ子氏は遅刻して二次会から参加、その後ふみの会に入会、直樹氏と結婚。

「一五三号」一九九二年二月三日

佐藤ユミ子氏がニュース編集に初参加。以後、長編・短編執筆の常連となる。

「一五四号」一九九二年三月一五日

塚原氏と若狭在住の武藤氏の往復書簡「若狭への手紙」「若狭海辺から」始まる。二人の往復書簡は、一九九五年九月の一八七号まで続く。

「一五五号」一九九二年四月二五日

四月一一日から一泊で行われた、会津若松合宿例会のスナップ写真を掲載。参加者、吉田夫妻、藤川夫妻・光（四歳）、佐藤ユミ子、山崎（幹事）、塚原・公平（一四歳）。

「一五六号」一九九二年五月二五日

ふみの会総会・文海一二号合評会特集。合評会の内容、総会の報告、星川たか子さん（元会員）からの文海十二号の批評のお便り、合評会のスナップ写真を掲載。参加者、吉田、塚原、雅人、反町、山崎、佐藤、安部、藤川、西口（重森氏友人）。

仲村さんの「四月一六日、手術を受ける」が掲載された。九月の出産に備えて入院手術を受けた経験を書いたもので、多方面に反響を呼んだ。仲村さんの書いた文章のうちでも最も印象に残ったものの一つ。

「一六三号」一九九三年一月三〇日

一月二三日に池袋で行われた、蒲原直樹、佐藤ユミ子両氏の結婚を祝う会のスナップ写真を二頁掲載。参加者七〇名、会からは、吉田、雅人、塚原、藤川が参加。

「一七四号」一九九四年一月三〇日

巻頭に、前年十二月十八日に行われた、忘年会兼「ふみの会の十五年を語る」会のスナップ写真。出席者は、吉田、塚原、雅人、直樹、ユミ子、山崎、藤川

「一八二号」一九九五年二月一二日

四カ月の空白をへてニュース発行が再開、発行場所が池袋のマイクロデザインから新橋の日報印刷に変更される。九六年の五月に塚原氏が日報印刷を退職するまで、一年余にわたって続き、新橋界隈の赤提灯の世話になった。印刷屋だけあってマックやスキャナーが完備している。ＤＴＰ（デスクトップ・パブリッシングソフト）を使って（手貼りでなく）一発出力で表紙その他の版下を作成できるようになった。

「一九七号」一九九六年七月二〇日

発行所を日報印刷から、雅人氏の職場である新宿、ビ・エイブルに変更。塚原氏は退職し、田舎暮らしを始めるべく日光に部屋数十以上という一軒家を借りる。田舎暮らしはいろいろな事情で実現しなかったが、会員は何度か押しかけて日光の自然を満喫した。ビ・エイブルでの発行は、九八年七月に雅人氏が退職するまで、二年間続いた。

「二〇〇号」一九九六年一一月一七日

三二頁特大号。初めての表紙カラー。表紙、裏表紙にブルーの色紙使用。

文学とのつきあい一八年（吉田）
山野の漂泊者―木地師を追って（武藤）
バンクーバー紀行３（直樹）
現場にて鬼となり
　鯉に連れられ帰宅する（塚原）
夜の銀蛾　連載三六回（藤川）
北の空　５（ユミ子）
鬼胡桃―おにぐるみ―（雅人）

「現場にて鬼となり」はあるいは塚原氏が書いた最もすぐれた短編小説。雅人氏の鬼胡桃は五六枚一挙掲載。不動産屋とのトラブルを描いたもの。書きたいという内的衝迫がはっきり感じられ、氏の書いた最も印象に残る文章であることは間違いない。

「二一〇号」一九九八年九月一九日

雅人氏が十年間無遅刻無欠勤で勤めた会社をやめ土鈴の製作に入る。この号以後は、新宿の四谷地域センター十一階でニュース製作が続けられる。二〇〇五年十月に完全オンライン、デジタルデータのやりとりだけで製作されるようになるまで、七年間新宿に通った。

以上、簡単にふみの会ニュース三〇〇号の歩みを振り返ってみた。初期の文章は稚拙である。しかし、三十年後の文章が同じ人間が書いたものだとは信じられないほどに深化しているのを見ると、人間の日々の研鑽と成長に終わりがないこと、文章の修行というのはただ文字を書く練習だというのではなく、人間と宇宙を見る目の成長と深化そのものであるということを思い知らされる。

墨跡鮮やかなりけり

塚原由紀夫

今年の夏、とある大きなお寺を散策しているときに出会ったKさんから、後日手紙をもらった。Kさんは８１歳になられる元小学校の先生という方だった。お寺は宗派の総本山で、一山すべてが寺の境内と墓地に振り当てられて広大なものである。ここを半日案内していただいた。山を下ったりまた、上ったり、私よりよほど健脚で驚いた。お寺の近くに住まわれていると言う。なにか気心があって、半日付き合っていただき、例によって私はデジカメ散歩のつもりでもあるから、失礼ながらKさんの写真なども何枚も撮らせていただいたのである。さっそく、帰宅してからこれをプリントし、Kさんに送り届けた。そのお礼としての手紙が来たのである。うれしかったのは毛筆で書かれていたことだ。毛筆の手紙をいただくなど何年ぶりだろう。

聞けば、退職後も学校に勤めていたらしく計６０年近く教職にあったという。戦後すぐからのことである。教えた生徒はこれまた合計すれば４０００人近くに上りますと微笑まれた。退職して久しいが、毎日のように教え子の誰かから手紙が届き、またKさんも毎日必ず一通はしたためているというのである。わたしのようにインターネットやコンピュータなどはいっさい使わないと言っていた。年の瀬が迫ってきた。本日、Kさんに年賀状を投函したところである。残念ながら毛筆というわけにはいかなかった。

毛筆といえば昨年の初夏、神奈川県近代文学館にて挙行されていた三島由紀夫展を見てきた折の印象が思い出される。三島由紀夫の原稿、書簡類などが会場いっぱいに並んでいたが、わたしに、ひときわ印象深かったのが、徴兵検査のために本籍地に帰り、そこから両親に充てた手紙だった。この手紙が毛筆で書かれてあった。終戦の直前のことである。彼は大正１４年生まれで昭和の年次と満年齢が一致している。昭和２０年には二十歳だった。書簡の冒頭に、お父さん、お母さんとかかれてあって、すでに死を決意したかのごとき文言が続いていた。まだ出征前だから死の決意とは、後年の三島の意識が露骨に現れたているような感じがして気になったが、当時の青年はみなこんなものだったのだろうと思い直した。いずれにしても三島の書簡を見て改めて墨字とは良いものだと思ったのだった。死の決意にいたるような緊張を強いられて、両親宛に襟を正して文章を書き記している二十歳の三島の姿が浮かんできた。そして毛筆書簡とはよいものだと改めて思ったのである。

墨字は当人の命をはるかに超え、歴史の波にもまれていく。いつまでも墨跡鮮やかなまま後世に残されていく。なにかの本で見たのだが、わが国は古写本の宝庫であると耳にした。和紙というものも丈夫なものであるらしい。和紙に記された墨跡は、さらに何百年と残されていく。

別の折に近くの美術館で藤原定家の日記である「国宝　明月記（めいげつき）」の展覧会があり見てきたことがある。もちろん無学の私などには、文意は読めないが、字というよりは、やはり書なのであり、いっそ画を見ているようにしか感じなかったが、それはそれは黒々とした墨の跡がいっそう鮮やかで見事なものだった。定家は鎌倉時代だったと思うから、すでに９００年近く経っているのである。これに比べればわれわれが使っているパソコンなんぞというもののいかにも貧弱である。ハードディスクがガタガタとうなりを上げている。「明月記」を見てきた、その日も墨による「書」にこめられた文章の強さ、文字の強さ、筆を取った当人の精神の強さ、その静かなことなどに圧倒される思いだった。紙背から、なにかが立ち上ってくるような不思議な感じがしたものである。昔の文化に、現代のわれわれは足元にも及ばないと痛感したのである。

小説

一人ぽっち

内田幸彦

（十二）敗　戦

その日、彦一は何故か落着かず、動員された工場を休んで家にいた。ラヂオの緊急放送のブザーがけたたましく鳴り、お昼に重大な放送があるから必ず聞くように、と悲愴に響き渡った。彦一は、てっきり国民への水際作戦についての要請だと思った。竹槍を作ろうかと思った。

正午が来た。近所の人々と一緒にラヂオの前に集まって耳を立てて聞いた。バリバリと雑音が大きく、天皇陛下の声が途切れ途切れで、「水際作戦や」と言う人もいれば、「負けたんと違うか？」と言う人もいて、意見が割れた。神国日本だから神風が吹く、と叩き込まれてきた国民には、急には信じられなかった。

翌日、新聞が敗戦を報じたので、やっと敗戦を知った。軍人の一部には各所で叛乱を起こす者もいた。一般国民は、《やれやれ終わった》という安堵感と、《いままで君のため、国のためと歯を食いしばってきたのに》という無念をどうすることもできない失望感で複雑な気持ちだった。夫を、親兄弟を捧げた悲しみが新たになった。

だが、毎夜の警報もなくなり、ゆっくり眠られるし、やがて身内も兵隊から戻って来るだろうし、男が帰れば何とかなるという希望も生まれた。

どこの街にも闇市が出来た。数年以上もお目に掛かったことのない天麩羅、饅頭、丼物、地下足袋、服、飴、チョコレート、それにアメリカ煙草まで、飢えた市民は闇市に群がった。

闇市を支配したのは、今まで日本に虐げられていた三国人だった。暴力団と手を組み、闇市を我がもの顔に支配した。所々で日本人との間に衝突も起こった。

それより残念だったのは、米兵と手に手を取って歩く売春婦だった。派手なワンピースに濃い口紅、ハイヒールを履いてハシャいで歩いた。昨日までの敵に、……。国民の目は冷たかった。彼女らにも生活がある。敗戦のドサクサで、仕事も無い。それしかなかったのかも知れない。しかし、米兵と喜々とした彼女らの立ち居振る舞い納得できなかった。

その頃、「男は外国に連れて行かれ、強制労働させられ、女は米兵に弄ばれる」という噂が流れた。女性が暴行を受けたという新聞記事も出た。現実に、気の早い女性には身内を頼って疎開した者もいた。

これからどうなる？　仕事は？　食糧は？　生活は？　と不安と混乱の世に流れたのが『りんごの歌』だった。「赤いリンゴに唇寄せて……」の明るい歌詞、陽気なメロディーが渇き切った日本人に希望を与え、誰もが口ずさんだ。この歌で九年ぶりに平和の世を実感したのである。スピカーを通して『りんごの歌』は高らかに流れた。

思想の自由、言論の自由、宗教の自由と、急に日本は自由ずくめになった。今まで、強制され、圧迫され続けていた後だけに、日本人は熱狂した。身分を忘れて自由を謳歌したのである。

「消費は美徳」との宣伝に日本人の生活は向上した。朝鮮戦争の特需、さらに神武景気、岩戸景気で高収入を得て、日本人は有頂天になった。華美と享楽を求め、国民は浮かれ、誇りも、道徳も、どこかへ置き忘れ、現代日本の乱れを迎えてしまった。

戦前・戦中は、どこの親も子供に「他人をいじめてはいけない」「お金は無駄に使わず貯金しなさい」「親兄弟は仲良く」など、様々な人間としての基礎教育をしてきた。戦後は消費と享楽が生活の基本となってしまった。

戦後の好況によって、不自由だった物資が氾濫し出した。あれも買え、これも買え、と国民は熱狂した。消費が増え、夫一人の働きでは追いつかず、妻も働いて消費生活に没頭した。

妻は家事・仕事を背負って負担が重くなり、発言力が強まり、男性の権威は退化して、ひいては現代の乱世に繋がった。豊かな生活、何でもありの自由の代償として失ったものも決して少なくはない。

（十三）就職［1］

彦一が学校を出た一九四八年（昭和23）は、敗戦間もなくで、事業会社自体も何を作ればいいのか、何が売れるのか、掴めていなかったように思う。

学校は出たけれど、一般の会社は殆ど新規採用していなかった。そこへ共産党が復活。今までの遅れを取り戻そうと活溌に活動を開始したから、ウッカリ採用すると労働組合を作られる恐れもあった。たまに採用しても、縁故採用で、知人の紹介でないと雇わなかった。

当時、銀行・市役所・学校なら、いくらでも採用されたが、数字に弱い彦一は、銀行など飛んでもないと思ったし、市役所のような陰気な所も厭だった。先生は自分に向いていないし、先生の子であったために散々迷惑して来た。彦一は会社員を希望したが、望む会社へは入れなかった。

「ガチャ万」という言葉があった。ガチャと機（はた）を動かすと万の金が儲かったというので、マスコミが生みだした新語である。織物に限らず、糸その他の繊維の黄金時代だった。

父を亡くし、母子家庭の子となった彦一に、そんな有力なツテもなく、頼りは新聞広告の短期的な仕事しかなかった。出来高制の販売員、倉庫係、保険の勧誘、競輪競馬の臨時雇い、……。これといって永続性のある仕事は無かった。

針仕事や買い出しに、だんだん老けてゆく母を見ると、ジッとしていられず、日銭欲しさに彦一は向かぬ仕事でも新聞広告を頼りにあっちこっちで働いた。

仲の良かった友達は、そこそこの地位にいる父親のお陰で一流会社へ入り、新調の背広に新しい靴を履き、いそいそと出勤していた。それを彦一は羨ましく眺めていた。

いずれ会社らしい会社へ入る心算だったが、五百円、千円で給料の良いところを求め、短期間に腰の落ち着かない職場を転々とした。それが悪い結果となった。そのような履歴に、会社らしい会社は、怠け者、あるいは永続きのしない男と考えたらしい。十通以上も出した履歴書に、不採用の返事か、返事なし。若い彦一に、そこまで考える知恵が無かったのである。

悩んでいる所へ、或る日、母の同僚だった教頭先生が訪れた。井村先生といった。

「儂の教え子が出世しているので、紹介してやろう」

と、個人会社へ入れて貰った。そこは、彦一念願の繊維関係で、綿の会社だった。

彦一は綿を早く覚えて営業に出して貰おうと、綿の勉強もし、他の仕事にも努力した。しかし、個人会社だけに、親族一統に先を越され、与えられた仕事は進物やお中元の配達と綿見本の整理だけだった。それでも、給料は入るし、井村先生の顔もあって、辛抱するしかなかった。

一年も経った頃、世話になっていた個人会社のお得意先――K紡績の依頼で新会社のD商事というのが同じ敷地にやって来た。

「うちは身内が多くて、君にいてもらっても先が知れているから、D商事に移らないか」

と、相談があった。個人会社が自分を重荷にしていると感じ、彦一はD商事春木工場に移籍した。

そのD商事は、綿の統制が外れて儲からなくなったから、綿部門を廃止し、彦一は本社の会計へ転勤となった。会計係というのは、彦一の最も苦手で嫌いな仕事だった。

内心、彦一は溜息が出た。どこまでツイていないのだろう、一番厭な会計係とは、……。でも、辞める訳にはゆかない。生活があるし、会計の仕事をマスターせずに辞めるというのは男らしくない。とにかく、仕事を覚え、一人前になるまで頑張ろう。そう肚に決め、心に鞭打って通うことにした。

商社だけに、一日に数千万円が動く会社は、楽ではなかった。経済科を卒業しているから会計係が適切だと会社は判断したに違いない。毎日の収支が合わなかった。収支が合わないと、経理部全員が帰れない。しかも、学校で習った簿記とは違って、会社の簿記は複雑だった。連日のように収支が合わず、経理部員はぼやいた。

「また、今日もか、……」

「いい加減にしてくれよ」

非難の声は益々高く、彦一が焦れば焦る程、計算は合わなくなった。

（つづく）

スカートめくり（後編）

蒲原　ユミ子

エリはほっと息をついた。校長先生もほっとした様子でトモコを見た。トモコだけ、ふくれていた。

「ユウタくんたら、だらしがない」

学校から帰ってすぐ、エリは自転車を引っぱり出し、トモコの家へ行こうとした。門を出たところで、エリによく似たぱっちり目のママが追いかけて来た。

「ハンカチとちり紙、持っていきなさいよ！」

エリは嫌だったけど、ママからハンカチとちり紙を受け取った。「ありがとう」は言わない。

（ママは過保護すぎる。だから、わたしはトモコちゃんみたいに強くなれないのだわ）

と、エリは思っている。けれど、ママに、「よけいなこと、やめてよ」とは言えない。

一人っ子のエリに、ママがつい世話をやいてしまう。ママはやき過ぎだとわかっていてもやめられないのを、エリもわかっているのだ。

自転車に乗って5分で、トモコの家『八百鮮』に着いた。

トモコのおじさんが忙しそうに自転車の荷台の篭に野菜や果物を入れている。トモコが店から出てきて、エリに言った。

「ごめん。1軒だけ配達してから遊ぼ」

「いいよ」

エリは笑ってうなずいてた。トモコには小さい弟が2人いて、トモコのお母さんはすごく忙しいのは知っている。トモコの配達につき合うのも初めてではないし。

静かな住宅街を、トモコの自転車がぐいぐい進んでいく。重い荷台を物ともしないで走って行く。エリは必死でこいで、後についていった。

柿の大木が花のように実をつけている家があった。トモコはその家の勝手口にまわり、大きな声を出した。

「こんちは！　八百鮮です」

ちょっとして、勝手口から大きなお腹をかかえたおばさんが顔を出した。エリはどこかで見たことがあるような気がした。おばさんはトモコを見て笑った。

「あら、トモちゃん。えらいわねえ」

おばさんが大儀そうによっこらしょと歩き出そうとすると、トモコが言った。

「あ、わたしが運びます、重いから」

そして、荷台の袋を「よっ！」と持ち上げ、どんどん勝手口の方へ進んで行った。おばさんは、「悪いわねえ」と言いながらドアを広く開け、トモコを中に入れた。

エリはぽつんと門の外で待っていた。

まもなく、ドアからトモコが顔を出し、片手で（おいで）をした。

「エリちゃんも来なよ。ケーキをどうぞって」

エリは初めての家で「ケーキ」は迷ったが、思い切りにこにこして誘っているトモコに引かれるように勝手口に入って行った。

おばさんは嬉しそうにエリをむかえてくれた。そこは古いけど、エリの家のよりずっと広い台所だった。おばさんは、

「女の子っていいわねえ。お手伝いはしてくれるし、可愛いし」

と言いながら、ゆっくりした動作で紅茶を入れ、いちごケーキを出してくれた。

トモコは遠慮なく「いただきまあす！」と手をのばした。紅茶をずずっと飲み、大きな口を開け、ケーキをおいしそうに食べ始めた。

おばさんも「妊婦はお腹がすいてね」などと言いながらうまそうに食べている。エリものどがかわいたなあと思い、おそるおそる紅茶に手をつけた。

玄関が開き、「ただいま」という声がした。おばさんは、「お帰り」と言っただけ。エリたちの方をにこにこしながら見ていて、立ち上がろうとしない。

「ああ、ハラへった」と言いながら、

ぬおうっと背の高い中学生が台所に入ってきた。エリとトモコを見てちょっと驚いたけど、冷蔵庫からジュースやリンゴを取り出し、すぐ出て行った。

おばさんは自分の息子には目もくれず、お腹をさすりながらエリに話しかける。

「女の子って可愛くていいわね。わたしも今度こそ女の子がほしいわ」

エリはおばさんの笑顔につられ、目の前のいちごケーキに手をのばした。

エリたちがケーキを食べ終わった時、玄関の方から、また「ただいま」と声がした。

おばさんは「お帰り」とだけ言い、冷蔵庫からプリンを出したかと思うと、エリとトモコにすすめた。

「お食べなさいよ、あなたたちは育ち盛りなんだから」

ケーキをぺろりとたいらげたトモコはプリンにも手をのばした。「いただきま～す」と言いながら。そんなトモコを見ておばさんはとても楽しそうだ。それで、エリもプリンをいただくことにしてそうっと手をのばした。

そこへ、さっきより背の高い男子学生が入って来た。エリたちを見て（え！）という顔をしたけど、さっさと飲み物食べ物を持って引き上げて行った。

エリがプリンを食べ終わった時だ。そうぞうしい音がして男の子が飛び込んできた。その子を見て、エリは心の中で（ギャアッ！）とさけんだ。

そいつは、ユウタだったのだ。

ユウタも、エリとトモコを見てぎょっとした。トモコは平然と紅茶の残りをすすっている。トモコはエリにここがユウタの家だってことを、わざと言わなかったのだろう。ユウタは（ちぇっ）という顔で冷蔵庫を開けた。おばさんがユウタをうながした。

「ほら、ユウタ。あいさつくらいしなさいよ。同じクラスで世話になっているんでしょ」

トモコは、きょうのスカートめくりさわぎなどなかったかのように元気よく、

「こんにちは」

と言った。ユウタはむすっとしたまま、あごをわずかにこっくりさせた。おばさんはそんなユウタを叱った。

「なによ。ちゃんとあいさつしなさいよ」

すると、ユウタはやっと小さな声で、「こんにちは」と言った。おばさんは心配そうに聞いた。

「おまえ、トモちゃんたちに何か迷惑をかけていないかい？」

トモコはエリを見た。エリは目をそらせた。おばさんはエリの顔を見て聞いた。

「うちのユウタ、何か悪いことしていない？」

エリは困った。けれど、おばさんの心配そうな顔を見ているうちに、首を横にふっていた。「だいじょうぶです」と言いながら。

その後、ユウタは女の子のスカートめくりをしなくなった。

男の子同士の腕白ぶりは相変わらずだったけど、女の子にちょっかいを出すことはなくなった。

エリはすごくほっとした。それなのに、何だか緊張感がぬけ、物足りないようなさびしいような気にもなった。ユウタが、少し離れた世界に行ってしまったような。

エリは、（こうやって少しずつ大人になっていくのだからね）と思うことにした。（完）

ニュース 150 号

混沌市凡日録　２１

赤衛軍

蒲原直樹

混沌ソレイユがＪ１に復帰した。混沌市役所には大きな垂れ幕が下がった。街を上げての祝賀ムード……とはいかないが、少なくとも混沌スタジアムとホームの日土スタジアム周囲の商店街では盛り上がった。ソレイユの動員力はあまり変化がないが、対戦相手の動員力が違うのだ。特に昔のライバルで今季の優勝チームである浦田ローズは熱狂的なサポーターが毎回スタンドを埋めてくれる。時としてホームチームを上回る動員力なのだ。商店街にとってこんな嬉しい敵はいなかった。

しかし混沌サポーターの一部には嬉しがってばかりはいられない事情があった。浦田ローズのサポーターとは何度もトラブルがあり、今もにらみあいが続いているのだ。ソレイユサポートチーム「太陽団」の東分団長・杉浦三平は今季のローズ戦をどうやって乗り切るか、考えると頭が痛かった。

（だいたい浦田って町がいけねえよな、県庁所在地なのに追宮に飲み込まれちまって、いつまでも日陰の存在だから、サッカーでうっぷん晴らししてるんだよ……）

あんまり他所のことは言えないはずだが、みんな自分たちの方はまともなつもりでいるのだ。

浦田スタジアムに行くときは大っぴらにソレイユサポーターの黄色いジャンパーは着られない。旗や横断幕などの小道具といっしょにバッグの中に隠していて、ビジター席に入ってからやっと着替えるのだ。スタンドのほとんどが真っ赤に染まり、黄色はほんの一部、という状態が毎度のことだった。それに輪をかけたのが「赤衛軍」の存在だった。

一昨年春の混沌ー浦田ビジター戦で、ソレイユＤＦが浦田のストライカー鳥王に猛烈なタックルをかけた。鳥王は転倒して起き上がれず、担架で運び出された。審判はＤＦにレッドカードを出したがスタンドのブーイングは収まらなかった。試合は１ー０でソレイユが勝ち、スタンドの不穏な空気は絶頂に達した。黄色いユニフォームの中に周囲から物が投げ込まれた。太陽団の中にも血の気の多い若者がいてこれに反発し、一部で殴り合いが始まった。そこに駆け込んだのが真っ赤な旗を掲げた赤衛軍メンバーで、太陽団の中心メンバーを引きずり出して袋叩きにし、団旗を奪った。杉浦もその時、唇を五針縫う怪我を負った。結局、浦田警察が出動してソレイユサポーターを救出するまで騒ぎは続いたのだった。

この時奪われた団旗の恨みは残り、今度は夏のホーム戦で赤衛軍の「軍旗」を奪う騒ぎが起きた。「赤衛軍は一人も渾沌に入れない」と宣言した西分団が、隊列を組んでソレイユ通りをやってきた赤衛軍に殴りこみ、旗を奪ったのだ。こうなると泥仕合だった。それから何度も両者の小競り合いが続いた。杉浦は西分団長の岡崎に和解を勧告したが、岡崎は承知しなかった。

「ダサイタマのど畜生どもになめられてたまるか！」

というのが彼の言い分だった。元暴走族だという噂のある男で、血の気の多さは赤衛軍と同レベルだった。杉浦は岡崎を説得するのを諦めた。そのかわりに赤衛軍の参謀総長（といっても二十歳くらいの若造だが）である堂本という男と会って話し合い、最低限のルールを取り決めた。いわく、

・バットや棒など武器を使わない

・正々堂々と闘い、個人テロを行わない

・軍旗やユニフォームなどいったん奪ったものは後で返却する

堂本は岡崎よりは多少まともな男だったのでルールは出来たが、これではいつでも衝突する、という戦争状態を解消することにはならなかった。向こうには東分団も西分団も区別がつかない。団旗を掲げている限り杉浦たちも襲撃されてしまう。「やられたらやり返す」で、西分団も無抵抗でいるつもりはなかった。結局のところ杉浦三平もフーリガンとたいした違いはないのだ。

昨年はソレイユの二部陥落で浦田との対戦はなかったが、さらに悪いことが起こった。夏のある夜、赤衛軍参謀総長堂本が襲撃されて負傷したのだ。渾沌サポーターが犯人だという証拠はないものの「戦争ルール」は破棄され、最悪の戦術エスカレーションが起こった。浦田市では「渾沌もの」と疑われた人間が拉致監禁され、アイスピックで太股を刺されるという事件が起こった。結局その人物は太陽団とは無関係だった。

この状態で太陽団と赤衛軍がぶつかったら死人が出る、さすがの西分団も動揺した。杉浦は団の溜まり場で岡崎たちに会った。すると西分団のメンバーはユニフォームの下にサラシや新聞紙を巻き、肘や膝にプロテクターを付けて、手には短い鉄パイプを加工したものやチェーンを持っていた。避けられない衝突に備えて早くも武装しているのだ。

「面白いから武装するものはいない、怖いからするのだ」

という言葉があるが、蓋（けだ）し名言、と杉浦は思った。

杉浦自身は立場上武装することは出来ない。しかし来るべき浦田戦に何が起こるか、それを考えると全身に冷や汗が流れた。そしてその日がやってきた。

三月のある土曜日、浦田は早朝から戒厳令下のような重い雰囲気だった。両集団激突の噂を聞いて埼玉県警は各所に検問所を設け、駅の改札には金属探知機のゲートが置かれた。指揮官クラスの顔写真が配られ、発見すれば一時留置する手はずになっていた。各地のフーリガンが何か起これば自分たちも参加しようと続々と集まり、浦田スタジアム近辺には北海道ナンバーや神戸ナンバーの車がひしめいていた。

太陽団はこれらの動きを見越して、前日から移動を開始していた。体育合宿の名目で隣りの釜口市運動公園を借り、そこに武器や防具を運び込んだ。当日は車でそこに集結し、武装してから徒歩で浦和スタジアムに向かった。しかし赤衛軍もさるもの、張り巡らせた情報網からこの動きを察知し、スタジアムから五百メートルの地点に防衛線を張った。バリケード用の車止めやテーブルが用意され、投石用の砕いたレンガやブロックが積み上げられた。勢力は太陽団が三〇〇、赤衛軍が三五〇で多少浦和側が優位だったが、年齢層が若いために実力的にはほぼ互角だった。

午後一時、二つのグループは五〇メートルほどの距離まで近づいた。

「そこで停まれ」

浦和側からハンドマイクの声が響いた。片腕を三角巾で吊った堂本だった。

「渾沌のゲス野郎どもはここを通すわけにはいかねえ、とっとと引き返しな、でないと手足の一本や二本なくすことになるぜ」

「堂本くん」杉浦がハンドマイクで応えた。

「君の遭難は気の毒に思うが、それは我々のやったことではない、見当違いの恨みを抱かれるのはたいへん迷惑だ。我々はどうしても渾沌ソレイユの応援に行かなければならない。君たちが進路をふさぐというのなら、蹴散らして通るまでだ」

ウォー！

杉浦の後ろでメンバーが怒号を上げた。こうなったら停められない。どちらの集団もめいめい武器を構え、隊列を固めた。一触即発のその瞬間、彼らが対峙する交差点に轟音が響いた。虚を突かれた集団が見つめる中に現れたのはアメリカンバイク、ハーレー・ローライダー・スピードスターに跨った黒尽くめの男だった。男は交差点の真ん中にバイクを停め、おもむろにヘルメットを外した。

「君たち、こんなことはやめなくちゃね、フットボールのファンとして恥ずかしいわ」

男の顔を見た両集団は自分たちの目を疑った。鋭い目つき、興奮すると思わず出るおネエ言葉、昨年のワールドカップ日本代表最終戦で突然引退表明し、今は世界中を放浪しているというあの人物だった。

「このケンカ、ボクに預けてもらいます。さもなければここにいる全員、今後の国際試合といわず国内試合といわず、すべてのゲームに参加できなくなるよう措置させていただくわ」

そこで男はＦＩＦＡ全権大使の身分証明章を高く掲げて宣言した。対峙する両集団は総崩れになり、全員が土下座して男の前にひれふした。

こうして太陽団と赤衛軍とは強制的に和解させられることになった。

杉浦はあとになってこう考えた。両集団は必ずしもＦＩＦＡの権威など認めていなかったが「誰かに停めてほしい」と心の中で強く思っていたのだ。あれはその結果なのだと。

今もサッカー界の黄門様は世界の紛争地を駆け巡っているとか。

ピアノ（4）

中井　豊

数学科の同級生に塾を任されていた男がいた。彼に「代わりにやってくれないか」と言われ、やってみることにした。

塾は普通の家の二階で開かれていた。家主のおばさんが学生にやらせていたのである。おばさんの兄は早稲田大学教授、息子は大阪大学の大学院を出て通産省電気試験所の研究員だということだった。また、二人の娘がいて、ともに音楽大学出身でピアノ専攻だった。長女は結婚して家を出ていて、次女がこの家から大学院に通っていた。

塾の夕方の部と夜の部の間に、おばさんは家族と夕食を共にするよう言ってくれた。家から自宅へは電車で一時間ほどだったが、塾が終わると帰宅は遅くなる。それで、気丈なおばさんは、下の娘さんと二人暮らしの家の二階に私を下宿人のように置き、食事から洗濯までやってくれた。娘さんの部屋は狭い中二階にあった。

娘さんは一階の音楽室にあったグランド・ピアノでベートーヴェンの「告別」を練習していた。さすがに、あざやかだった――実のところ、どれくらい高度な腕前か、当時の私に判ったかどうかは疑わしい。今なら、少しは評価できると思うが、……。

その頃、私には将来結婚するつもりで交際していた女性がいた。同じ大学の文学部の学生だった。塾の生徒が多かったので、彼女に手伝ってもらうことにした。おばさんは快く同意した。

二階は畳の部屋にビニールの絨毯が敷かれていた。塾が終わって生徒たちが返った後、娘さんは二階に上がって来て、黒板の下に落ちた白墨の粉を拭いてくれた。娘さんは色気のない地味な身なりで、両膝をついて丁寧に雑巾がけをする姿は、内に強い意志を感じさせた。

私は文学部の女性と、どういうつもりで交際しているかを話さなければならなくなった。それを聞いたおばさんは、想像していたようだが、私に裏切られたように言った。そして、翌月から私は塾を辞め、この家を出ることになった。

或る朝、おばさんが慌てふためいて二階へ私を呼びに上がって来た。

「娘が叩いても起きない」と言う。

娘さんは部屋のベッドで眠っていた。ベッドの傍らに坐って呼び掛けても反応がない。おばさんは「睡眠薬を飲んだらしい」と言う。私は１１９番に電話し、救急車を呼んだ。

外は好天だった。救急車を待つ間、朝の日射しを受ける土道は異様に明るかった。《自分が曖昧にしたことの結果かも知れない。そのために娘さんの命にかかわるような事になったら……》と私は慄然とし、卑怯な自分と向き合わざるを得なかった。

病院では早速胃の洗浄が行われ、娘さんの意識も回復した。娘さんは、「迷惑かけて済みません」と言った。睡眠薬を飲んだのは眠れなかったからだったようだ。理由を訊ねることは憚られた。その月末、私はこの家を去った。

同級生に会った機会に、いきさつを話すと、

「俺が辞めたのも、おばさんは塾をさせながら娘さんの結婚相手を探しているようなので、それが煩わしくなったのや」

と言った。娘さんは黒目がちで色の白い立派な人だったから、おばさんのお節介がなくとも適当な相手が見つかったに違いない。

大阪市内で小学生の女の子の家庭教師をしたことがある。お父さんが中学校の音楽の先生だった。この子に数学（算数）を教えていたのである。

このお宅で、音大の受験生がレッスンを受けているのに出会わした。ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ作品79（第一楽章）」を弾いていた。ト長調の軽快な曲で、古典的な曲をテンポよく最後まで弾く良さを感じた。もちろん、先生が弾くとずっと小気味よく良い音だった。私が教えていた女の子は、音楽中学へ進学するとかで、バッハの「イタリア協奏曲」を弾いていた。

お父さんも、その姉も大阪教育大

学の特設音楽部（音楽の教師または演奏家を目指す学部）出身で、姉は母校で声楽の助教授をしているというような話だった。和歌山県の田舎と違い、都会の便利な環境で早くからピアノを学ぶ子供に接したのは初めてだった。

後年、確か大阪府の新人演奏会で、この子の名を見つけた。ピアノの腕が順調に伸びた結果だろう。とは言え、ピアニストの世界は自由業であって、サラリーマンのようにはゆかない。ピアノを弾く喜びを見出しているだろうか。

ピアノ演奏家の世界というのは、著名な国際コンクールで上位に入り、話題になった上で、さらに独自の演奏をし、聴衆にメッセージを送り続けなければならない。数学もそうだが、音楽も国境を越えて理解される普遍性がある故に、一流とそうでないのとでは経済的に雲泥の差が生まれる。奇怪なことである。

思えば、私が小学生だった頃は、ピアノのある家は本当に稀だった。次第に経済的に豊かになり、ピアノの普及率は飛躍的に上がった。驚くべきことだ。それと共に、情報が一世を風靡するため、演奏家は余程の教養と覚悟がないと音楽をやる喜びを見失うに違いない。

最近の私は親しい人達の生演奏を大切にすることで、商業的なピアノの世界を忌避するようにしている。

（おわり）

ふみの会ニュース 49 号

街中の似顔絵師（七）

瀧本　文彦

思い出の小道を妙子さんと歩いた。台湾料理店の前で、僕は蛙の料理を食べた話をした。

「その料理を私も食べてみたいわ」

と言ったので、

「今度この店に来ましょう」

と応えた。

仕事の二時間前に出勤し、この通りにある「ジニアス」と言うジャズ喫茶で、僕の好きなウイントン・ケリー・トリオの演奏する「枯葉」や、バド・パウエル・トリオの演奏する「クレオ・パトラの夢」や、セロニアス・モンクがソロピアノで弾く「ラウンド・ミッドナイト」や、ドラムのアート・ブレイキーが率いるジャズ・メッセンジャーズ楽団の演奏する「危険な関係」を、薄暗い席でコーヒーを飲みながら時々聞いていたことを話した。

妙子さんの好みの音楽はどのようなジャンルの音楽なのか聞かなかったが、ジャズには興味がなさそうだった。僕は若い頃、相手が興味があろうがなかろうが自分が感動した音楽、好きな音楽が最高の音楽なのだと押し付ける癖があった。

世界には色んなジャンルの音楽があり、それぞれの国にその国独自の伝統音楽がある。それぞれの民族に独自の言葉を持っている。その言葉にふさわしい音楽を持っている。その民族の風土に根ざした民話があり神話がある。人それぞれの音楽との出会いがあり感動を胸の内に持っている。

僕の若かりし頃、ヨーロッパの伝統音楽であるクラシック音楽と、そのクラシック音楽の延長線上にある「現代音楽」と呼ばれている音楽が最高の音楽と思っていた。狭い視野の中で自惚れていた自分が恥ずかしい。

僕は妙子さんと音楽の話は殆んどしなかったように思う。付き合い始めた頃は僕から音楽の話をしたが、

妙子さんから音楽の話をすることは無かった。一番の趣味は音楽で、楽器の演奏に関心を持ち、自ら何か楽器を演奏し、音楽に一言居士の女性より、音楽は趣味のほんの一部であり、音楽を話題にすることの少ない女性がいいなと思っていたので、そういう面でも妙子さんは僕の付き合いたい女性に近かった。

妙子さんとって、僕は付き合ってみたい男性であったのだろうか。僕は女性の気持ちを思いやったりせず、女性の立場や考えていることを気にもとめない自己本位の付き合いをした。妙子さんは大卒と聞いたので、

「どの大学で何を専攻していたのですか」

と聞いた。

「聖心女子大で英文科にいました」

と言った。

「兄弟が二人で兄がおります」

とも言った。

「お兄さんはどの大学ですか」

と聞いてみた。

「兄は慶応大学で経済学部を卒業しました」僕は立て続けに聞く。

「お兄さんはどう言うお仕事をしているのですか」

「大手町の農林中央金庫に勤めています」

「お父さんも大卒ですか」

「父親は京都大学の工学部です」

「どういうお仕事をなさっているのですか」

「特許庁に勤めていましたが、今は定年退職して家で弁理士の仕事をしています。時々父の事務の仕事を手伝っていますが、やる気がなさそうです。時々仕事が入る程度で積極的ではないので、私は今、オフィス・アワタキと言う小さな会社でアルバイトをしているのですよ」

「その会社でどういう仕事をしているのですか」

「色々な会社の書類をワープロで整理して纏め、その書類を依頼された会社に届ける仕事です。ワープロを操作する技術をマスターしたくって、仕事が終わると会社に残ってワープロの練習をさせてもらっています。ワープロが楽しくって、オフィス・アワタキで仕事をしています」

「ワープロというのは操作するスピードを高めたり、正確性を高めなければその道で飯を食ってゆけないのですね」

「そうです」

「僕は十年間ピアノを弾いて生活をしていましたがピアノとそういう所はよく似ているなあ。ただ違うのはピアノは感情を込めてキーを叩く事かな」

「私はワープロのキーを叩くとき感情を込めていますよ」

「え、それは何ういう事ですか。思う様に操作が出来なくてイライラして腹が立ち乱暴にキーを叩いてしまうのですか」

「そういう事ではありませんが。ピアノは腹の立つ事が有ると乱暴な弾き方になるのですか」

「ええ……、そうですね。多分、腹の立つことが有り、むしゃくしゃしていると乱暴なタッチになるかなあ。でも、クラシックは楽譜に作曲家が此処のところは優しく、此処は静かに、此処は柔らかく、と書いているからね。腹が立ち怒りをぶつけたくても指示に従って弾かなくては変な曲になってしまいますね。腹の立つことが有ったらベートーヴェンの曲を弾くといいかなあ」

「ベートーヴェンは何時も腹を立てて作曲していたのですか。ピアノも乱暴に弾いたのですね」

「いや、何時もではないですけど、腹の立つ日が多かったようですね。腹が立つとピアノを乱暴に弾くどころか、二階の窓から椅子を放り投げたり、床を踏み鳴らしたり、飾ってあった石膏像を床に投げつけ、こなごなにしてしまったり、部屋を歩き回りながら怒鳴り散らしたりしたそうです」

「迷惑な方ですね」

「腹が立ってイライラしてウイーンの町を二十回近く引越ししたんじゃないかな。引越しした理由が振るっているんですね。二階がうるさい、下がうるさい、両隣がうるさい。うるさくって作曲に集中できないからと。うるさいのはベートーヴェンの方なんですね。真夜中に突然ピアノを弾き始めたり。隣近所からうるさいと言われ、住民から苦情が殺到し、そこに居られなくなったのでしょう」

「……」。

（つづく）